

人種問題の差別と偏見

福井県立武生東高等学校 一年 上坂 舞由

「人種に起因する社会問題」、異なる人種間に集団または、個人レベルで現れる人種関係のなかで社会問題化したものを「人種問題」という。

人種問題の発生とは、一体いつからなのだろうか。実際に調べた資料には、「人類史をさかのぼると、異なる人種間の接触は少なかつたため、人種問題は存在しなかつたか小さかつたと考えられる。」と著してあつた。しかしそれに続けて読んでいくと、人種問題が世界の舞台に躍り出たのは、近世の植民制度が発達した以後であることが分かつた。

人種問題の中でも、一際目立つのが「人種差別」ではないだろうか。人種差別は、多様な形態をもち、生活のほぼ全ての面において張り巡らされたという。例えば、白人は有色人に対して土地と主権を奪い、政治的・市民的自由の権利の制限、低賃金・過酷な条件での労働、言葉遣いや礼儀作法までも規制が行われていたらしい。このような差別は、公的な面だけでなく、私的な面にも及んだという。日本を一例とすると、アイヌ系住民に対する人種差別の他に、旧植民地と国内植民地に民族差別があり、現に今も存在するという。

なぜ、このような「差別」によって、全く罪のない人間が苦しみ、それぞれ個人の自由までもが奪われなければならないのか。差別をしている人間には、差別をされている人間の苦しみや怒りを考えたことがあるのだろうか。そして、何のために差別をする必要があるというのか。

一躍世界で話題になった、アフリカ系アメリカ人の「オバマ氏」が黒人で初の米大統領に就任したことを覚えているだろうか。

私は、白人優位のアメリカで初めて黒人として大統領になるということは、決して簡単なことではないと思う。そして、オバマ氏自身も黒人を差別する人達からの批判や差別に苦しんだことだろう。しかし、オバマ氏はこのようなことを語っ

たのだという。

「リベラルのアメリカも保守のアメリカもなく、ただ「アメリカ合衆国」があるだけだ。ブラックのアメリカもホワイトのアメリカもラティーノのアメリカもただ「アメリカ合衆国」があるだけだ。」

私には、まだこの言葉の意味はあまり理解できないけれど、本当はすごく深くて意味のある言葉なのだろう。そして、それは現に今も差別をうけている人達にとっては、一つの「救いの言葉」になったのかもしれない。

私は、世界中に外見も文化も異なった様々な人間がいるからこそ、すごくいいと思う。しかし、「偏見」が「差別」を引き起こしているのだと思う。そこでまずは、自分と異なった人間に対して偏見をなくすことが、差別をなくす一つの大きなきっかけになると思う。そうすればきっと、皆が「平等で自由な世界」が少しずつ切り開かれてくるのではないか。